

でも、志望者が多くて困る時は入學試験をします
子供は三つの時から落第の經驗をするのです。そ
れから中學校高等學校の入學試験は皆血を吐く思
ひです。思ひだけでなく、高等學校には入れなかつた爲めに、實際血を吐いて死んだ人もあります
どんな偉らい人も、試験の爲めに、その精力の大半を吸収せられつゝある始末です。此の問題には
皆頭を痛めて居るのですが、まだ解決がつかないのです。之を一人に任せるといふ事は無理な注文
ですから皆協力して最良の方法を講ずる事に進んで努力すべきであらうと思ひます。自分が當局でないからしらぬ顔に打ち過すなどはよろしくないと思ひます。

殊に婦人は、ともすれば見聞がせまく、頭が狹

隘になりやすいから、進んで興味をひろくもつやうに、なるべく多く物事を見たり聞いたりして、
出来るだけ智識を開發せられん事を切望いたします。直接に關係のないやうに見えても、とんでもない處に關係のある事が多くあります。殊に幼児の保育などには、各種の智識を要します。多い子供の遊び相手をして居れば、學問などなくてもよいのではありません。その根本に遡れば遠く哲學にまで通曉して居なければなりません。フレーベルの保育説なども哲學に其基礎をおいて居るので、すとうぞ、フレーベル會の皆さんは、なほ熱心に勉強なされて、學問の上に深く興味を持つて、子供を保育して下さるやうに切に御願ひいたしておきます。(文責記者、校閲を経ず)

教育上から見た子供の摸倣全盛期

兒童發達の最初の一年間位は人間を模倣するこ
とが多いと言つても、其の模倣するに當つては、
時に、人を人として意識して模倣することは少く
無意識的な反射的模倣の方が寧ろ多いのである。
嬰兒も同じ人間で、人間の身體の有機的組織を持
つて居ればこそ人間の模倣することが多いのであ
るけれども、其の模倣する時には、人と物との區
別を判然と意識して居るわけではないことは明か
である。其の模倣は頗る受働的である。所謂去る
ものは追はず來るものは拒まずとでも言つたやう
な態度で、人が來れば人を模倣し、物が來れば物
を模倣しやうといふ傾向が、其の時々に従うて發
現して來るばかりである。未だ決して、其の模倣
しやうとするものを豫期するといふやうな心的情
態は認められぬのである。然るに、兒童が次第に
發達して來ると、何時とはなしに變つて來る。先
づ、運動するものと運動しないものとの識別をし
て、運動するものには特に注意するやうになる。

更に進めば、運動するものゝ中でも、人と物とを
區別するやうになる。人と物とを區別するやうに
なる頃となれば、兒童の興味は特に人に向つて集
注せらるゝやうになる。此處まで進めば、此の章
で述べやうとする模倣の時期に入るのである。此
の時期を特に、人格の模倣の萌芽期と名けて置か
う。即ち人格の模倣の萌芽期とは、兒童が特に人
に對する被暗示性の著しく發現して來る時期を稱
するのである。

人格の模倣の萌芽期に就いては、ボルドウイン
氏が詳細に論じて居る。それで以下ボルドウイン
氏の論を紹介して、且つ、余が考を述べることにし
やう。ボルドウイン氏によれば、兒童は既に生
後第二ヶ月の頃ともなれば、其の抱かるゝ時の心
持などによつてよく母親や乳母などを其の他の人
から識別する。母親や乳母の抱いたり撫でたりキ
スするのに、其の特有のところがあるのを、子供
は鋭敏に感受する。かくして、子供は母親や乳母

から自分を取扱つて貰ふ特有の方法全く順應してしまつて、其の手に抱かれて居る間はおとなしくして居るが、一寸でも他人の手に抱かれると直にこれを感じして烈しく反抗する。その感じの鋭いこと實に驚くばかりである。これは母親や乳母の子供を取り扱ふ方法が、不知不識の間に子供に母親や乳母の人格を暗示するものであると解すべきものである。而して、子供にとつては斯様な「人格の暗示」の感せられて居るか否か、直に現在の幸不幸を定むる譯となるのである。即ち母の手に抱かれて居るといふ感は、子供にとつて幸福なる感であつて、他人の手に抱かれて居るといふ感は子供にとつて不幸なる感である。斯様に子供が人間に對する感じは、人間以外の物に對する感じとは全く異つて居る。嬰兒が物に對する感じは其の食慾を満足させる物を除くの外は人間に對するほど切實ではない。反之、人間は嬰兒にとつて愈々益々大切なるものとなつて、嬰兒に對する快苦の

主宰者となる。人間の動作及びその嬰兒に及ぼす影響は、嬰兒が「人を感じる」の最初期に於て最も重要なものである。それから次第に子供が生長して來れば、聲によつて人を識別するやうになり、遂には顔及びその表情などによつて識別するやうになる。

ボルドウィン氏は更に此事に就いて自身の實驗の結果を述べて居る。ボルドウィン氏の子供は氏が暗中で出来るかぎり乳母の手つきなどを真似して抱き歩いても矢張り泣き叫んだ。乳母や母親以外の人がその子を抱いて靜に坐してでも居れば、その子はまあおとなしくして居たけれども、一度其の人が立ちあがつて、乳母や母親の真似をして歩きはじめでもしやうものなら、忽ち烈しく泣き叫んだ。其の動き方歩き方が何となく違ふといふ事が子供に直に感せられる。其の故は、いつでも子供が身體の工合が氣持よくない時などに、母親か又は乳母から取り扱はるれば、直に氣持よく愉快

になるのに、他の人から取扱はれる時には何とな
く工合が違つて、いつものやうに心持よくならぬ
此に於てか、子供には、見識らぬ人に取扱はれて
居るといふ「感じ」が鋭敏にはたらく。そこで泣
き叫ぶといふ譯になるのである。斯様に子供が
其の母親又は乳母から抱かれて居るといふ温かな
感じを持つのは、如何なる要素を條件として居る
かと尋ねて見れば、随分偶然的の事がその要素と
なつて居る。たとへば乳母の動き方とか、身振り
とか、奇妙な癖とか、子供をして自分は親しい
人に抱かれて居るといふ温かな感じを起さしむる
に十分なる要素となるものである。ポルドウイン
氏の子供の一人は、氏が歌ふ唱歌の調子を二つ聞
き知つて、夜でも其の唱歌の調子をさけば、氏が
側に居ると感じて安心した。他の唱歌を歌つても
此の子供を落ちつかせることは出来なかつた。そ
れから今一人の子供は、食物を求めて泣く時は燐
寸を擦つて火をともしれば直に泣き止んだ。尤も火

をつけてから食物を整へるまでには大分時間を要
したのであるが、其の最初の點火と共に泣き止ん
だのである。而して他の事で泣く時には、燐寸に
點火したからといつて決して泣き止むことはな
つた。

以上は大體ポルドウイン氏の所説であるが、今
これによつて考へて見れば、嬰兒が、最初には、其
の身を取り扱はるゝ時の心持によつて、人の識別
をするといふことは争はれぬ事實である。嬰兒は
母の顔を知り母の聲を知る前に、既に、母によつ
て取扱はるゝ事が他人によつて取り扱はるゝより
も如何ほど自身に心持がよいかといふことを鋭敏
に感ずるものである。即ちポルドウイン氏の論じ
て居る通りに、嬰兒は母親乳母など常に己れに親
近して居る人の個性としての特質を感知して、一
度此の特質に順應すれば、それから後は此の特質
を現在身に感じて居るといふ事は嬰兒自身にとつ
ては必要缺くべからざる安寧の條件となつて、そ

れを現在身に感じて居なければ直に不安缺乏の感を惹き起すこととなる。此の如くにして、母親や乳母に於ける特質を感知すれば、それが嬰兒の一般感覺に於ける一種の習慣となるものである。習慣といふものは或る點に於ては快苦の境を超越するものである。ボルドウィン氏は、嬰兒に一種の苦痛がある時母親乳母などが來つて其の動作によつて嬰兒の苦痛を去り、こゝに快感を惹き起すといふやうな道行即ち「苦痛——動作——快樂」の過程を以て、嬰兒が母親や乳母と他人とを感知識別する根本として居る。斯様なことも固より重要な事實であることは争はれぬ。さりながら、嬰兒は必しも他人に取り扱はるゝのは苦であるから他人を避くるのであると定つて居るものでもない。また母や乳母に抱かるゝことを喜ぶのは、必しも快であるからと明かに認められないやうな場合もある。時としては、母や乳母に抱かるゝ方が苦痛であるといふやうな場合にも、嬰兒はなほ母親や

乳母の懷に抱かれてはじめて落ちつくものである。これは、外觀上は苦と見えても嬰兒にはそれがかへつて快であるからであると解釋しても宜しいかも知れぬけれども、實際母親や乳母に抱かるれば正しく窮屈で確かに苦しいに相違ないやうな場合でも、嬰兒は窮屈な目にあひながらも、なほ母親の懷に於てはじめて落ちつくものゝ少からぬことを考ふれば、これは全く、嬰兒が習慣的に母親や乳母の特質とよく順應して居るために、寧ろ快苦の境を超越して、如何なる場合にでも母親や乳母の懷に於てはじめて眞の温か味を感じるからであると解する方が正當ではあるまいか。燐寸の點火といふ事が嬰兒の泣き啼ぶのを停止したのも習慣によるのである。故に、嬰兒が人間といふものに就いて識別を爲し始むる時期の心的状態は、豫期の心的状態にあると言つて宜しい。即ち母親や乳母から取り扱はるゝ時に感ずる温か味を待ち望んで居る心の有様である。同一の事が繰り返さるゝこ

とを待ち望んで居るのである。

併しながら、人格といふものは複雑なるものである。生きた人間は單純なるものではない。故に此處に一つ考へなければならぬことがある。嬰兒が母親や乳母などの一定の特質を豫期するといふことはなるほど事實であるけれども、更に考へて見れば、嬰兒にとつては、物と相對して居る生きた人間といふもの、特性は、常に同一の事を同様に繰り返すといふ事に存するといふよりも、寧ろ其の次には爲す事が豫め測り難いといふ事に存するといふ方が正當であらう。嬰兒が手に遊ぶ管の笛は、これを吹けば常に必ず音を發する。其の作用は常に一定して居て、音を發するより外的ことではない。故に、嬰兒はその始めて笛を手にした日から數日たゝぬうちに、自在にこれを遊ぶやうになることが出来る。然るに、生きた人間は斯様に簡單なるものではない。生きた人間の動作が色々な形で現れて來る有様は極めて複雑であつて、常

に同様の音を發するに止る笛などとは到底比較せらるべきものではない。故に、嬰兒が稍々生長するに及んで、生きた人間に對する時には、其の動作を豫知することが出来ない。尤もかく言へば前と矛盾した事を言つて居るやうであるが、決して矛盾したことを述べて居るのではない。前のは極めて初期に當つて母親や乳母などといふ親しく接する人の特定の特質を感知し豫期することを述べたのであるが、今はそれよりも稍々進んだ時期に父親母親乳母などをはじめ一般の生きた人間に對する子供の心の情態を述べて居るのである。さて、此の時期に於ては、子供が父親母親乳母などに對する時、父が自分を如何に取扱はうとするか、母が自分に何を與へるか、乳母が自分に對して何事を禁ずるかなどといふことを豫知することは子供にとつては頗るむづかしい事である。此に於てか此の時期の子供にとつては生きた人間といふものは云はゞ神祕なる作用を有するものと思はれるやう

な傾がある。従つて、子供は人間に對しては、たゞ、その人の爲す所を大なる注意を以て豫期するといふ譯になる。而して、此の豫期の心的情態にある兒童は最も感受性に富んで居るものであつて暗示を受け易く暗示を受け易い爲に直に模倣をするといふ次第になる。ホルドウィン氏は人格の模倣の萌芽期は實に此の時期であると論じて居る。

氏の論を辿つて見れば次の通りである。模倣といふことが發現して子供の生活に於て極めて重要な地位を占めるやうになるのは正しく此の時期である。子供は他の人々が如何なる動作をするか見ようとして構へて居る。何となれば、子供自身の幸と不幸とは全く此の如何にすべきかといふことに懸つて居るからである。故に、子供の心はあらゆる動作の暗示を受容れるやうに開かれてある。子供の注意は極めて些細なる事にも及ぶ。而してそれから暗示を受けてはこれを自分の行として模倣的に發表する。それは反應運動の自然の法則と

してかくあらねばならぬからである。子供の生後第二年及びそれから暫くの間は、子供がその周囲にある人々に對する感じは正しく此の時期にあるのである。子供が自分に關係した動作に出會ふ度に、また自分に對して色々話されることを聞く毎に、「何故？」といふ質問を連發して止まないのは、正しく、子供が生きた人間といふものに就いて理解に迷つて居る證據である。無論子供は何故といふわけを了解することは出来ない。そこで子供にとつてはたゞ單に「お母さんが宜しいと仰言る」「お母さんがいけないと仰言る」といふだけのことが理由になるばかりで、子供自身に豫めこれを測り知ることは出来ないのである。

却説、此の人格の模倣の萌芽期は前章に論じた時期よりも一段を進んだものであるけれども、なほ、此の時期に於ける子供は受動的であるといふことは、右のホルドウィン氏の述べて居ることを考へてもわかるであらう。そこでホルドウィン氏

は此の時期に所働期といふやうな名をつけて居る。子供は豫知し難い生きた人間の動作によつて、常に力強い暗示を受け、此の暗示によつて行動するものであるから、此の時期にあつては模倣的動作は子供の動作の各方面にわたつて著しく現れて来る。思へば、兒童發達の全時期に於て、模倣といふことが最も勢力を有してあらゆる動作を見るに随つて何でも眞似をするといふ時期は、此の時期ではあるまいか。かくして子供は模倣を繰り返して居る間に、次第次第に生きた人間といふものに就て明瞭なるを觀念を持つやうになつて来る。即ち、子供自身の外部に存する色々の生きた人間は畢竟活動するものであるといふ考が、次第に子供の心の中に起つて來て、それから日數がたつにつれて、子供は自分も亦一人の生きた人間であつて色々活動をするはたらき者であることを自然に知るやうになる。斯様にして、生きた人間といふものは活動する者であるといふことがわかるやうに

なれば、其の次には色々の人に就いて、その活動の有様が種々様々に異つて居るのを知るやうになる。尤も活動の有様といつても、こゝでは所謂分業的の仕事を目指すのではなくて、同じ仕事をするにして性格によつてその仕事をする有様が色々に異なるのを指して言ふのである。そこで、子供は色々の人の性格に接する間に、人間の性格の識別といふことも臆氣ながらわかるやうになる。此の時期をポルドウイン氏は自證期といふやうな名をつけて居る。氏によれば此の時期は兒童發達の第二年の終及びその以後である。而して子供が自己の意志を以て他を律しやうとする、即ち、ポルトウイン氏の所謂發働期は、子供が自分も亦一の動作者であるといふ事を知つた後に始るものであつて既に此の時期に入れば子供の模倣は稍々個人的特色を帶ぶるやうになる。此事に就いては後に委しく述ぶるつもりである。

以上述べた所を換言すれば、所働期から自證期

自證期から發働期と、次第に子供の精神が發達して來る上に就いてこれを見れば、子供に於ける人格の模倣の萌芽期は、所働期から自證期にかけた頃であるとして宜しからうと思ふ。所働期は全く外部に對する受働的順應の時期である。外部から刺激が來るに従つて、その時々々の調整を行つてこれに順應して行くのであつて、その間には何等豫期の心的情態はないのである。故に此の時期に於ては、經驗はその度毎に單に受働的に受取らるゝ然るに次第に經驗が積まれるれば初期の自我觀念を生ずる。其の頃になれば、此の初期の自我觀念と相伴つて豫期的注意が現れるやうになる。即ち、豫め經驗を心の中に想像して待ち構へるといふやうな心の情態が發現して來る。而して、此の豫期的注意は、所謂類化作用を行ふ致知覺又は統覺といふものゝ芽蒨とも稱すべきものである。此に於てか子供の精神の發達は自證期に入ることとなるのである。此の豫期的注意のはじめて著しく發現し

て來る時が、即ち人格の模倣の萌芽期となるのである。

却說、既に幾度も述べたことであるが、人が人を模倣するといふことは、その有機的組織の同一といふことを前提の事實として有するのであるから、最も自然に適つた事と言はなければならぬ。最も自然に適つた事であるから、兒童發達の初期にも人を模倣することの最も多いのは自然の數である。固より一歳乃至三歳の子供は、或は犬を模倣し猫を模倣して、匍匐しながら猫の食器から食物を食べたり、或は馬を模倣して飛びまはつて、厩に入れられて喜んだりすることは少くないけれども、これを人を模倣する事の數に比較すれば、極めて少ないのである。「ラッセル氏序、兒童觀察錄第一集、模倣及びこれに關連せる活動」といふ書のはじめに記述せられた一歳から三歳に至る子供の模倣百九十一の場合の中で、子供が馬犬猫などの動作を模倣して居る場合は、その内八つに過

ぎない。その餘の百八十三の場合の中の大部分は、子供が大人の動作を模倣して居るものである。これによつて考へても子供が人間以外のものを模倣することは人を模倣することに比較して極めて少いといふことは察せらるゝ。然るに、教育といふことを考へて見れば其の作用はたとひ多端にわたつて人以外の自然物などがその間に重要なはたらきをすることがあつても、畢竟は人が主であつて、一人前の人間が子供を導き教へて一人前の人とするやうになるまでの仕事を指すに外ならぬ。故に、子供が人間を模倣することが最も多いといふ事實は、即ち、教育上に於て模倣が重要な手段となることを意味するのである。人格の模倣が教育上大切であるといふ第一義は此に存する。然らば、一歳から三歳までの幼少なる子供が人を模倣する事は教育上如何なる意味を有するものであらうか。今少しく立ち入つて述ぶる必要がある。

抑々子供が生れてから後、次第に發育して感覺が發達し活動力が増進して來るに従つて、はじめは漠然として居た經驗が次第に明瞭になつて分化して來るものである。經驗の分化といふことは、即ち、經驗が複雑になつて來ることを意味するのであつて、經驗の複雑になると同時に、外界に對する順應といふことは愈々其の必要の度を増して來るのである。而して、新なる外界に對する順應は新なる經驗となり、新なる經驗は常に子供の心意の發達を促すものである。子供が新なる外界に對する順應の法は固より多くある。併しながら、子供が外界の生きた人間に對する場合に於ては、模倣といふことは比較的容易であつて且つ有効な順應の手段である。然らば此の模倣といふ手段で子供が生きた人に對して順應するといふことは如何なる意味が含まれて居るだらうか。カークバトリック氏は、自發的模倣といふ名の下に、すべて自然界のものたると人事界のものたるとを問は

す、子供の耳目に觸れて自然に模倣運動を起す事實を述べて居るが、氏がその自然的模倣の價值に就いて述べて居る所を見れば次の通りである。自發的模倣の價值は、知識とか動作する力とかいふものになつて、澤山の材料が貯へて置かるゝといふ事に存する。此の貯へられた材料は、使用されたり、分析されたり、結合されたりして、將來の活動に於て一の目的のために用ひらるゝ。斯様にして得られた知識は、其の範圍極めて廣く、且つ、最も基礎の固いものである。何となれば、それは客觀的であると共に主觀的であるからである。子供は、動作や音聲を耳目に觸れて學ぶばかりではない、動作を行つて自ら感じ、音聲を發して自ら感じて學ぶのであるから、子供はその動作や音聲を認識するばかりではないこれを支配するのである。斯様に自發的模倣によつて子供は世界を自己のものとして爲してその支配權を握るのである。

右カークバトリック氏が自發的模倣に就いて述

べて居ることは、直に移して、余の所謂人格の模倣の萌芽期の意義を論ずる資料となることが出来る。子供が生きた人間を模倣するに當つては、甚だ多方面にわたるものである。苟も子供の能力及ぶ範圍に於ては、人の爲す事のすべての方面にわたつて模倣を行ふ。故に人と人との關係上起り得べき日常の動作は、悉く子供から模倣せられぬものはないと言つても宜しい。此に於て、子供が人の動作を模倣するといふ事の意義は、生きた人と人との關係に於ける種々様々の動作に就いての經驗を蓄積して、將來社會的關係の中に立つ人としての準備の第一歩に入るといふ事に存する。即ち社會的關係といふうちでも、特に、日常の努力實踐躬行といふ方面の經驗の蓄積の基礎として意義を有する。固より人の動作を模倣しても、其の結果としては子供は知識を獲得する。しかし、其の知識は知識として獲得せられた知識ではなくて、實踐的の動作の結果として産出せられた知識

である。故に、斯様にして得られた知識は、カークパトリック氏が述べて居る通り「客観的であると共に主観的である。」單に耳目に觸れたといふやうな力のない知識ではなくて、實際に子供を動かす力のある知識である。子供は單に耳目を通じて人の動作を知るに止らず、身自ら模倣してこれを實行するのであるから、自分の心の内部から切實に動作を感じるのである。故に子供は動作を認識するに止らず動作を支配する。元來ひろく之を觀すれば、子供が眼前に展開する世界の萬象に對して單に耳目によつてこれを知るに止らず、身自ら事物の間に入つて、手足の筋肉や全身の力を使つて或は事物の位置を變じ、或はこれを破壊し、或は新しく組み立てるやうな事を實行するのは、極めて意味の深いことであつて、子供はこれによつて世界の萬物と親しい心の關係を結ぶものである。斯かることを實行した子供の心には、此の世界といふものは自分とかけ離れた乾燥無味なる外

界ではなくて、常に自分と密接なる關係を持つて居る自分の領域である。自分の心の領域である。カークパトリック氏が自發的模倣によつて子供は世界を自家のものとすると言つて居るのも、畢竟は斯様のことを意味するものと思ふ。これによつて考ふれば、子供はまた、生きた人間を模倣することによつて、人間の社會的關係を自家のものとするものではあるまいか。子供が若し耳目を通じて人と人との關係を知るに止つて、絶えてこれを實行することがなかつたならば、社會的關係や人の行爲の問題などが、その子供の成長の後に眞に切實にこれを動かすことが出来るであらうか。斯様な子供は、恐くは、その成人の後には精神上的不具者となり終るであらう。常に自己の薄弱な知識薄弱な空想などの領域に立てこもつて、血あり、涙あり、奮闘あり、努力ある現實の人生からは見棄てられた人として、其の一生を終るならば、其の人の受けた教育の意義は果して何處に存するで

あらう。併しながら吾人は徒らに想像を逞うして悲しむを要せぬ。吾人には蹈むべき道は既に示されてあるではないか。子供は動作をせずに静止して居るものではない。子供は生の初に於て既に吾人を模倣して動作するではないか。子供は人格の模倣の萌芽期に於て、人の動作を模倣する事によつて、人と人との關係に關する實踐的知識を得るものである。子供はこれによつて、次第に、人の社會的關係、即ち、人生その物を自家の知識の領域にとり入れて、以て人と人との社會的關係を支

『ポウル・ドンビー』(ヂッケンス)

(一)

|| 英文學に現はれたる子供 (十九) ||

岡田みつ

これから少しヂッケンス(Dickens)の小説中の子供を御紹介します。此號のは「ドンビー・エンド・サン」といふ小説の中にあるポウルと申す男の子の事です所々を抜いて掲載致します。ポウルは満五歳に近くなつた。可愛らしい子で

配する勇ましい首途の第一歩に踏み入るのである。日と共に月と共に子供は進むばかりである。其の進路に光を示して、子供の模範となり、子供の指針となるべき人は誰であらうか。嗚呼我が敬する天下の父母たる人よ、兄弟たる人よ、教育者として深く心に思はねばならぬのは實に此處に外ならぬのである。(此の一篇は近日出版せらるべき著者の『實踐教育上より見たる兒童の模倣』と題する著述中の一節にして、特に著者に乞うて茲に掲載したり。編者識)

はあるが顔に何だか勢せいのない思ひ沈んでゐるやうな所があつて、乳母を少なからず案じさせた。ポウルは時には子供らしく戯あそげまはる事もあつて、